

トマト萎凋病（レースJ₃）対策に関する研究

第1報 接木に関する試験

青木和年・古田勝己

（熊本県農業試験場）

本県の促成トマト産地では、従来、大型瑞光が用いられていたが、近年、トマト萎凋病（レースJ₃）の発生により、生産が極めて不安定となり、はなはだしい場合は、産地の存続も危ぶまれるような状態となった。そこで、本病の対策として、抵抗性品種の検索及び、抵抗性台木を導入しての接木栽培試験を、本病汚染ほ場で実施し、併せて、接木栽培の穂品種の選定も行ない、一応の結果を得たのでここに報告する。

1. 試験方法

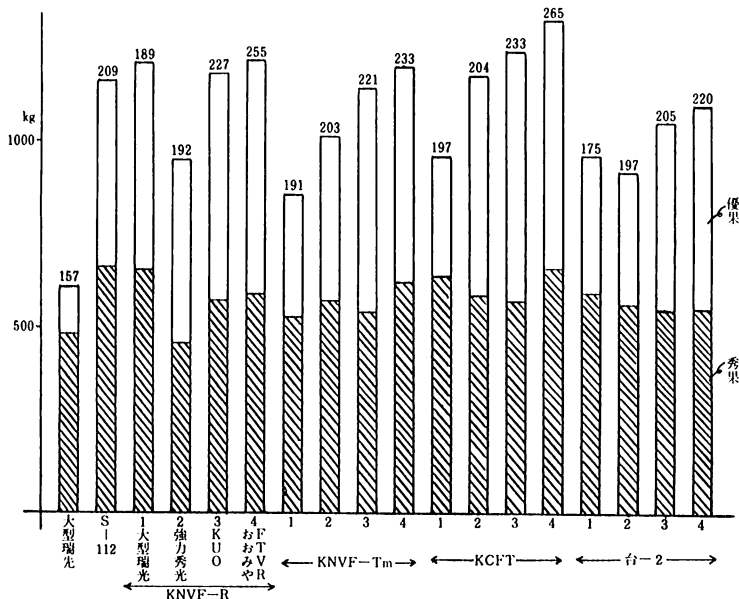
供試台木として、KNVF-R（坂田）、KNVF-Tm（みかど）、KCFT（むさし）、台-2（坂田）を用い、穂品種として、大型瑞光（坂田）、強力秀光（むさし）、おおみや FTVR（トキタ）、Kuo（園研）を使用した。標準として、大型瑞光自根、対照として S-112（坂田）を供試した。試験規模は、1区3.6m²（9株）、2区制とした。播種期は台木9月10日、穂木9月16日、移植期、9月27日、接木期、10月12日、定植期、11月20日であり、栽植密度は252株/aとし、施肥量、温度管理その他は、熊本

県玉名地区春トマト栽培耕種基準に従い、玉名郡横島町の現地ほ場で試験を実施した。収穫期間は、2月初～5月末であった。

2. 試験結果

草勢は KCFT を台木として用いた区が最強、台-2 が最弱であった。萎凋病（レースJ₃）は大型瑞光自根区以外には発生しなかった。収量は、S-112及び、接木区はいずれも標準より多収を示し、特に台木では、KCFT 及び、KNVF-R が、穂品種では、Kuo 及び、おおみや FTVR が多収を示した。果型は台木では KCFT、穂ではおおみや FTVR が特に大となり、秀品率は接木によりいずれも低下した。

以上より、本県産地の状況を考慮した場合、収量、草勢などから、接台としては KNVF-R が最適であり、実用品種としての S-112 は、果型、すじぐされ果などに難点がある。穂品種としては、おおみや FTVR が最も有望と思われるが、更に検討の要がある。



第1図 a 当たり収量の比較（図中数字は良果1果平均量）